

Title	子宮頸癌の話
Author(s)	奥平, 吉雄
Citation	癌と人. 13 p.12-p.13
Issue Date	1986-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24051
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

子宮頸癌の話

奥平吉雄*

ガン研究の現状は遅々としてではあるが着実に進行している。にもかかわらず、いまだにガンに関するいろいろな問題は解決していないばかりでなく、総数という点では世界中で徐々に増加の傾向すらみられる。そしてガンの治療は早期発見、早期治療であるという30年前の格言が大手をふって歩いているのもまた現状である。さて子宮ガンによる死亡率は、過去20年程の間に3分の2近くに減少して来ているのであるが、死亡率と発生率は全く別の数字であるからこれによって子宮癌が減少したということにはならない。つまり子宮癌になる人が減ったのか社会予防医学も含めた取扱い法が改善されたためかは充分には解らないということであるが（おそらく後者が大きな役割を果たしていると考えられる）、結果としては喜ぶべきことである。しかし手放して喜んでいられないところもあるのである。それは、胃ガンや子宮ガンが減ると肺ガン、膵臓ガン、腸ガンが増えるという世界的な説があり、特に日本では肺ガン、乳ガン増加の問題が無視出来ない現状にあることはよく御承知のことと思う。このような癌の統計的な数字を読む場合に最も関心を集めることはどうしてそうやって来たのかということである。この解答はむつかしすぎてよく解らないのであるが、全く常識的に理解出来ることは、生活文明の進歩がもたらす必然の結果ともいえるべき発癌物質が新たに人工産生され、さまざまな形で人体に侵入していることと、基本的には平均寿命の延長によりガン年齢まで生きる人が多くなったということである。しかしここで注意すべきことは、最近ガン年齢が下りつつあるという傾向である。一般にガン年齢とは、男子で40才、女子で35才からガンで死亡する人が多くなるということを示すもので、そのころからガンを警戒しなければならぬというわけである。子宮ガンについてもその傾向がうかがわれ30才代の

子宮頸癌が増えていることはいろいろな施設からの報告書をもみても明らかにかがわれる事実であり、このような事実をふまえて最近では30才を過ぎたら子宮癌検診を受けるようにすすめている次第である。癌のほんとうの原因は依然として不明と言わざるをえないが、癌の病因追及の一つの方法として社会的、医学的、生活環境条件などについて疫学的な検討がなされ子宮癌との関連について興味のある研究発表がされている。ここでそのうち2～3について書いてみたい。まず、性交渉が子宮頸癌の発生と関係があるという調査の中で、修道女に頸癌発生が少ないということはよく知られた事実である。そうすると婚姻（性交渉）においてどのような要素が特に注目されるかということになる。まず、初婚および初交年齢について調査した結果から頸癌患者の初交年齢はそうでないグループより若年であることがわかった。この初交年齢は最も重要な因子で、他の因子にも影響を与える。比較対照に比べて頸癌患者では2倍以上のものが15才から17才までの間に初交を経験していることは注目すべきことである。その他初婚年齢、および性交の相手の数も調査上重要な因子であると考えられる。すなわち子宮頸癌患者には性交の相手の数も多いという調査結果が出ている。一般に子宮頸癌は妊娠回数の多いものに多発すると考えられているが、妊娠回数については統計的にみるとあまり差がないようである。また流産の回数も関係なしとされている。その他自宅に風呂を作ると子宮ガンは減ると一般的に言われているが、子宮頸癌は不潔にすることがどうもよくないようであり、これはまた陰茎の清潔度とも関係すると言われる。ついで子宮癌における遺伝的關係について少しふれてみることにする。子宮癌を含めた多くの癌にくつかの外的因子が存在するであろうことはまずまちがいないことであるが、こういう外的因

* 大阪大学助教授、微生物病研究所附属病院婦人科長

子だけで説明することにも無理が生ずる場合がある。つまり同じ因子が作用しても癌になる人とならない人があり、外因に対する反応のしかたはしばしば遺伝子の組み合わせによって影響されるということである。癌の遺伝性の有無を考えるときに思い出されることは癌患者が多発した家系が実際に存在するということである。子宮癌も例外でなく特に体癌（子宮体部に出来る癌で日本人では比較的少ない）の家系例が多く外国の例ではあるが、極端な例では6家系を調べ家系員684名中165名の24%に癌が発生したというレポートもみられ、この場合には特別な発癌と関係した素因が遺伝すると考える以外に説明はむつかしい。また双生児の研究でも一卵性の方が二卵性の場合より同一癌の発生する頻度は高く子宮癌でも同様の傾向がみられ、これらをまとめてみると子宮癌患者の血族は対照に比べて子宮癌罹患率が高くこの傾向は子宮体癌に著明である。また子宮癌患者の血族には子宮以外の癌に比べて子宮癌が多発しており子宮癌に特有な罹患傾向がうかがわれるということである。ガンとウイルスとの関係は古くから研究され一時は相当数のガンの原因はウイルスであるという説も出、頸癌と関係するウイルスとしてヘルペスⅡ型ウイルスが原因ではないかと言われたことがあったが、最近ではヘルペスウイルス説は影をひそめそのかわりにコンジローマウイルスとのかかわりがとりざたされているが結論はまだ出ていない。

さて、もう既に御承知の方もおられると思うが、昭和60年11月27日（水）の新聞に“新ガン予防12カ条”，守れば6割“安心”という記事が出ていたのでここでその新12カ条をもう一度

列挙しておく。

- 1) バランスのとれた栄養をとる。
- 2) 毎日、変化のある食生活を。
- 3) 食べすぎを避け、脂肪はひかえめに。
- 4) お酒はほどほどに。
- 5) たばこは少なくする。
- 6) 適量にビタミンと繊維質のものを多くとる。
- 7) 塩辛いものは少なめに、熱いものはさましてから。
- 8) こげた部分はさける。
- 9) かびの生えたものに注意。
- 10) 日光に当りすぎない。
- 11) 適度にスポーツをする。
- 12) 体を清潔に。

この一部改訂は（癌研究の進歩、国民食生活、生活習慣の変化などにもとづいて）、7年ぶりに行なわれたもので新12カ条の解説によると、これを積極的に実行すればガンの約60%（禁煙で30%、食生活の工夫などでさらに30%）が予防できるだろうとするものである。12カ条の中の5番目にたばこは少なくするとなっているが、喫煙が健康上よくないということは最近特に強調されている。ところでタバコと子宮癌とは関係あるのだろうか。この問題についてはあまり研究されていないが、ごく最近のニュースの中で、カナダのホリー博士の発表を紹介すると喫煙婦人では子宮頸部から分泌される粘液中に細胞の性格を変化させる因子を含有する率が非喫煙者より高いということが述べられている。しかしまだこの種のデータは不備な点があるので、喫煙と子宮頸癌をむすびつけるにはいたらないが、やはり一つの警告にはなろう。

